昭和 38 年度
（1963）

積雪期明神岳五峰から奥穂高岳

昭和 39（1964）年 3 月 4 日～ 21 日

明神岳五峰西尾根から明神岳を経て前穂高岳。その後奥穂高岳から涸沢を経て上高地。前穂高岳東壁 A・B フェース登攀および奥穂高岳から西穂高岳縦走は悪天候による豪雪のため断念。

当合宿は悪天候に災いされ、計画を全部完遂することはできなかった。しかし、今までの合宿が好天ばかりで、ともすれば春山は簡単なものという感を抱く可能性があったことに対して、春山といえども、一度天候が変われば、冬山にも劣らぬ厳しい山となることを認識しただけでも収穫があったと思う。

穂高の稜線が他の山と比較して、アイゼンワーク、ピッケルワークの面から見て、我々の技術一杯のところであることが分かり、今後の基礎訓練の方針を与えてくれた。テントワーク、その他の面では、いろいろと不手際があったし、完全な合宿とはいえなかった。

今回はフィックスザイルにクレモナを使用したが、十分な効果を上げることができた。また、トランシーバーの使用に絶対の信頼を置いていると、重大な支障をきたすことも、身をもって経験した。

とにかく、今合宿の最大の欠点は、計画樹立において十分な時間をかけなかったことである。少なくとも春山が一年の総決算と銘をうつなら、夏山あたりでもう山は決定している必要があると思う。十分な研究と団結が無くしては、完全な山行などあり得ないのである。

最後に、当合宿が事故もなく終わったことに対して、部員諸君にお礼を言いたい。また、ふつつかなリーダーによくバックアップしてくださったことに対しても感謝したい。　CL　松尾　武久

参加メンバー

L 松尾武久　柴田武明　出島五郎
記録　真野孝一　会計　板谷真人　装備　宮崎敏孝　新谷　剛
医療　西阪　孚　食糧　小川　勝　中村　洋　福原正昭　気象　宇都宮昭義
（縦走隊、柴田武明　板谷真人　宮崎敏孝）

行動概略

4 日　晴、沢渡－山賊小屋
5 日　晴、山賊小屋－沢渡－山賊小屋
6 日　晴、山賊小屋－河童橋－前明神沢出合 BC
7 日　雪、BC －山賊小屋－ BC
8 日　風雪、沈殿
9 日　曇、柴田隊・BC －五峰下 C1、松尾隊・BC －五峰下 C1 － BC

10 日　晴、柴田隊・五峰下 C1 －三峰 ABC －五峰下 C1
　　松尾隊・BC －五峰下 C1
11 日　風雪、全員・五峰下 C1 －三峰 ABC
12 日　風雪、沈殿
13 日　風雪、柴田隊・三峰 ABC －アタックキャンプ
　　松尾隊・三峰 ABC －五峰下 C1 －三峰 ABC
14 日　風雪、沈殿
15 日　風雪、松尾隊・三峰 ABC －アタックキャンプ－三峰 ABC
16 日　風雪、沈殿
17 日　風雪、松尾隊・三峰 ABC －アタックキャンプ－三峰 ABC
18 日　雪、柴田隊・アタックキャンプ－前穂高岳－アタックキャンプ
　　松尾隊・沈殿
19 日　晴、柴田隊・アタックキャンプ－前穂高岳－奥穂高岳－白出のコル
　　松尾隊・三峰 ABC －五峰下 C1
20 日　晴のち雪、柴田隊・白出のコル－涸沢－横尾－上高地バス停
　　松尾隊・五峰下 C1 －河童橋－上高地バス停
21 日　曇、全員、上高地バス停－沢渡－松本

春山合宿日記（抜粋）

3 月 9 日　晴れのち曇り

積雪量も少なく、ラッセルも軽い。快調に高度を稼ぐ。前明神沢をトラバースするときに注意した。雪も良くしまり、雪崩の危険も無さそうである。尾根をやめて沢に取り付く。沢はノンストップで高度を稼ぐ。全員ハッスルして、90 分ワンピッチでテント地に着いた。テント地は五峰よりワンピッチくらい下のなかなか良いところである。下りも沢を使い快調に下った。

3 月 11 日　晴れのち雪

朝 4 時頃は、天気が良かったが、出発のときには雪が降り出した。しかし、雲は薄いので思い切って出発する。偵察隊のいうとおり、雪がしまっていないので歩きにくい。フィックス地帯も三峰の登り以外はショッパクない。テント地を三峰のトラバースの終了点、二・三のコルのすぐそばとする。階段式のテント地を作る。上が我々の青ミード、中が黄ミード、下が装備テントである。

雪は相変わらず降っている。行動中は風を伴い、厳しい行程であった。顔面凍傷になった者が 2 人いた。

3 月 13 日　晴れのち雪

5 時の天気図によれば、黄海辺りに低気圧、また日本海にも低気圧があって、天気は午前中持つと判断して、柴田他 5 名はアタックキャンプへ。残りは五峰のデポを取りに行く。五峰までの間で天気は悪くなりだし、デポ地点では奥穂高岳は見えなくなっていた。

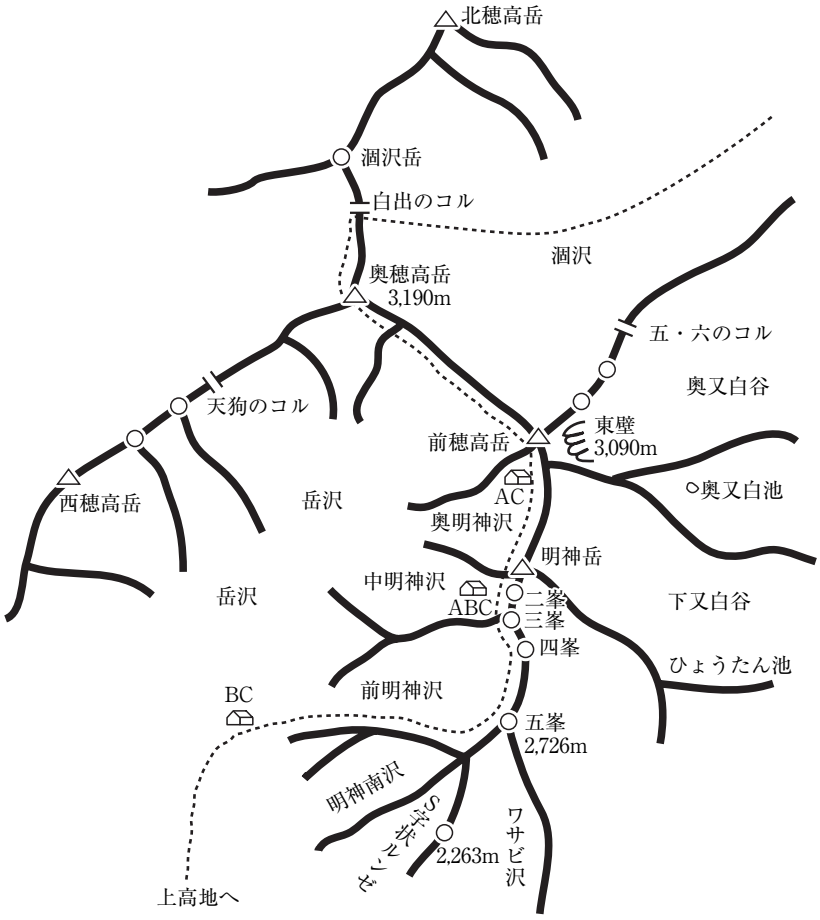
帰路四峰あたりは風が強く、凍傷にかかった者が多かった。

4 時の天気図によると、二つ玉が出現している。明日は沈殿となるだろう。

3 月 17 日　風雪

天気図の予想をかけ離れた天気である。4 時半頃の風がものすごく強い。6 時に朝食をとり、8 時 25 分、天気の良くなるのを見こして、アタックキャンプへ 1 年生を連れて行く。往路は時々風が吹くくらいで、雪がチラチラ舞っていた。1 年生はフィックス地点のアイゼン技術がまだぎこちない。アイゼンをフラットに置いていない。

雪洞で久方振りに全員集まって話をする。今日、



明神岳・穂高岳概念図

3時半頃、アタックしようとして起床したらしいが、天気が悪くなって取り止めたらしい。2時間ばかり話をして、明日天気が悪ければ、撤収のことを考えることで意見の一致をみた。

復路は、風が強く、また雪も一層降っている。全員、睫にツララを下げてテントに着いた。天気図では、天気がひょっとすれば良くなりそうである。しかし、週間予報では、19日、21日、24日と天気が悪くなることを告げていた。

3月18日　雪

渤海湾あたりの高気圧は、西日本方面に張り出しているにもかかわらず、朝から音も無く深々と雪が降っている。50cmも積もったであろうか。オホーツク海の低気圧の影響であろうか。

交信によれば、アタック隊は、前穂高岳アタックを敢行したらしい。こちらは前穂高岳に行くのを止めて沈殿とする。チャパティーを喰っていると、東京農大の人が、フィックスの使用料としてピーナッツをくれた。

3時の交信で、B・Aフェースのアタックの中止を指示する。この積雪では、V字のトラバースは不可能であると判断したからである。縦走隊の出発は、柴田に一任した。今度の高気圧の後に低気圧がもう来ているので、全員でアタックキャンプを撤収することになるかも知れない。

初の穂高でとうとう退却を強いられた。敗退という言葉はこの際使いたくない。敗退となるのは、全山行を通じての連絡や、部員の活動等で決定されるのである。多くの山行には、目的を完遂しても、その過程の杜撰なものが多い。我々の山行が、その様なものなら完全な敗退であろう。我々の山行が部の発展の試金石となって、反省に反省を重ね、次の世代の人々の礎石となれば、本望である。山は決して逃げないのだ。

我々は、明日より第４次計画に入るが、この際、全員気持を引き締めて、スムーズな安全な下山をしたいものだ。

3月19日　晴れ

長い沈殿も、今日の快晴で終止符を打った。今までの苦しみを忘れさせるような快晴である。穂高の稜線の美しいこと、黒い岩と白い雪。すこぶる美しい。

7時半、テントを出て明神岳へ向かう。頂上で出島・真野・西阪が撤収してきたのに出会う。柴田達はこの天気を逃すことなく縦走に向かった。

フィックスを撤収して、キャンプをたたみ、今日の宿泊地の五峰へと急ぐ。途中、三峰のフィックス終了点で、今は亡き２先輩の霊に黙祷を捧げた。縦走隊は吊り尾根で、同時に花束を投下した。遭難はしたくないし、またしてはならないと心に誓った。

五峰の広い雪原にテントを張り、春山合宿の残り少ない日を楽しむことにした。空は青く、太陽は輝き、のんびりとした気分である。

3時の交信によれば、縦走隊はちょうど奥穂高岳に着いたと言ってきた。ラッセルがひどく、腰まであったらしい。リーダーの柴田は、西穂高岳へ回るのを止めて、今日は穂高小屋に泊まり、明日ザイテンを降りてくると言っていた。天気が続く見込みがないので、それも仕方ないと判断した。彼らの健闘を祈るのみである。

3月20日　雪

低気圧が意外と早いスピードで来たので、予想を見事はずされた。4時半に起床し、天気は良くないが、上高地へ下ることにした。登りに使った沢は、積雪が多いため、リッジにフィックスをして尾根を下った。雪がしっかりしていたので、あまりショッパクはなかった。

岳沢を膝までのラッセルで、軽く飛ばす。雪はベタベタして、衣服はベットリと濡れ、気持が悪い。バス停で薪を燃やして、衣服を乾かす。一時間ほどして、縦走隊の衆が穂高小屋から下山してきた。皆で無事を祝しあった。夜は打ち上げのウィスキーを飲む。美味なり。明日、一日を無事に下山して、真の無事を祝いたいものだ。成功・不成功はそれから決まるものだ。

アタックキャンプでの生活

SL　柴田　武明

アタックキャンプの設営

快晴に恵まれて入山したが、いざ穂高の懐に入ると、山は霧に蔽われがちで我々を冷たく迎えてくれた。

3月13日、空はどんよりしているが、一日持ちそうである。いよいよAC建設、冷え冷えとした、三峰のキャンプ地を後にする。二峰の直下のトラバースに着く。トラバースというよりも下ると言った方が良い感じ。フィックスを付けながら一歩一歩ステップを切り下る。クラストした雪で、積雪が無く、岩にアイゼンの歯がきしむ。岩壁の下を通り、ガリー状の雪壁をトラバース。ここは足場を切り拓くには微妙なバランスを必要とする。ともすると身体が投げ出されそうになり、足場ごと崩れそうだ。ここのフィックスは、計画より長くて70mは必要。思ったより長く、厳しかったので2時間を費やしてしまった。

一峰･二峰のコルに着いたときから、天候は厳しくなり、いきなり強風にあおられる。低気圧の接近により、西穂高岳の方から雲に隠れ、奥穂高岳、前穂高岳と霧の中に消えていく。そして刻々とその重苦しい霧が我々に迫り、ついに明神の主峰にて見舞われる。横殴りの風にバランスを崩されそうになる。

奥明神の下り、道が雪に埋まりよく判らない。ここで40mのフィックスをする。夏道どうししか行きようがない。奥明神沢からの強風にあおられ、目を開けていられない。岳沢側は風に吹かれ積雪はないが、その雪が又白側に積もり、美しいカールを描いている。コル近くの又白側に雪洞を掘る。これでアタックキャンプが出来上がった。

偵　察

雪洞生活は、終始悪天候に見舞われたモグラ生活であった。そして5日後の3月18日、ようやく太陽を見ることが出来た。前穂頂上アタックとA沢とV字状の偵察に行く。

奥明神沢のコルからの岩場にてこずる。不安定な岩に積もった雪で非常なバランスを必要とする。A沢の入り口を間違える。夏ならなんでもない所だが、雪に覆われ前穂高岳への道も、未知の頂に登るがごとく変わっている。前穂高岳のピークは、春山を十分味あわせてくれた静かな山であった。夏にあれほど多く見られるケルンも僅か一つ二つ現れているだけであった。奥穂高岳も北穂高岳も静かに深い雪に埋もれ、眠っているようだ。涸沢にも足跡が見られない。

東壁の偵察を行う。そこは風がなく、シズシズと降った大量の雪がベットリと付き、テラスも雪壁となっている。岩壁には雪が付いていないので登るには問題がないが、V字状と第二テラスはまさに壁のごとく急である。三本槍から雪庇を落としてみると、鈍い音と共に落ちていったが、ただそれだけである。別に雪崩もしない。涸沢や岳沢にも雪崩の後はない。

A沢の下り口は雪庇になっており、これを崩して下りる。下又白の沢は積雪が余りなく、石の塊がごろごろしている。第一尾根のコルからA沢はテントが10張り以上張れる雪原となり、緩やかにA沢に落ちている。またA沢も夏のあの狭いガラガラした面影はなく、幅広くカールをなしており、そうとうな積雪があるようで不気味であった。

V字状へのルート偵察に行く。雪は軟らかいし、積雪が非常にある。左岸へと少しずつ下りていく。雪は腰を越え、動きが鈍くなる。雪は踏むと崩れ、足場が固まらない。A沢からV字状への沢の中間へトラバースする。この沢はさらに雪の状態が悪く、足場が出来ず、登ることが出来ない。天候が悪化し、雪がぱらつきだし、時間的な問題から、ここで偵察を打ち切った。

今日の偵察から、雪の状態は雪崩そうではないが、不安定な締りの悪い雪で軟らかく、足場のできない雪である。また積雪が深く、特に急斜面の登攀は困難となるだろう。雪のしまるのを待ちたいが、余り見込みはない。沈殿が続き、計画日数を大部経てしまい、前穂東壁アタックは断念せざるを得ない。あまりにも積雪が多く、一日二日では落ち着くようすがない。ちらついてきた雪は、風も加わりさらに気持を暗くする。残念である。かつて多くの先輩たちが登り親しんできたこの岩場を登ろうと、張り切ってきたのに、今はそこを背にし、天候が悪化しないうちに穂高を離れなければならない。また、いつの日か訪れることもあろう。そのときは明るい太陽の下で迎えてくれ。

吊り尾根における奮闘

19日、前日の降雪は僅かであり、半日の晴天であったが雪は少し安定しているだろう。さらに東壁と違い、吊り尾根は風のため積雪は少ないだろう。今日は高気圧の真ん中、華中にある低気圧がくるまで、一日半は持つだろう。これらのことを考えて、縦走に出発した。朝、空は晴れ渡り、まぶしい。久しぶりに見えるひょうたん池のテントにも灯火が見える。朝の冷えた空気に身も引き締まるようだ。

静かな春山である。まさに我等の穂高という感じ。これほど山と自分が近づいた感じは余りない。前穂高岳からアイゼンをきしませて下る。涸沢への夏道からコンテニアスで行く。吊り尾根にかかり誤算が出た。風で吹き飛んでいるはずの積雪が飛んでおらず、非常な積雪となって山肌も岩も道も埋め尽くしている。リッジどうしに行くしかない。雪がこんもりと積もっているので、いちいち落とさなければ進めない。しかもまさにナイフリッジである。

非常にバランスと注意が必要。遅々として進まない。僅か200mくらいになんと3時間かかっている。途中、じれったくなりトラバースを試みた。しかし、何遍も通ったこの吊り尾根も、その

道がはっきり分からない。雪の下にクラスト層が出来ており、今にも雪崩れそうであった。コンテニアスをしているが、この急傾斜の不安定な体位では、もしもの時、確保できる自信がない。岩も雪に隠れうまくトラバースが出来ない。時間がかかっても確実なリッジの方が安全なので引き返す。太陽はすでに高く頭上にあるのだが、奥穂高岳はまだ遠い。しだいに焦りがでてきた。雪をピッケルで落とし、アイゼンで足場を確かめる。かがむようにして一歩一歩足場を作る。ようやくのことコルを過ぎて、奥穂高岳の登りにかかる。振り返ると、なんと僅かな距離に、非常な時間がかかったのだろう。天候は良い。穏やかな静かな山。しかし山はそんなに甘くはなかった。やっと滝沢の上部についた。3年前、若き命をこの吊り尾根で亡くした岩本、伊藤両先輩、その現場には来ていないが、ここで両先輩に花を添え、黙祷をした。電波に乗り明神三峰を下っている本隊と共に両人の冥福を祈った。

奥穂高岳より3人のパーティーが下ってくるのが見える。南稜との分岐点が雪庇になっているらしく、南稜を下り、下を巻いてまたもとの雪庇の下に出てきた。吊り尾根のナイフリッジを行くときは、自分たちでルートを切り拓く喜びがあったが、余りに難しく、時間がかかった今となっては、この人達のトレースが助けになる。早く奥穂高岳に着きたい。しかし事故を起こしてはならない。あせりがちな心を静め、ひたすら奥穂高岳へと登る。雪をかき、雪庇を落として進む。雪庇は涸沢側に低い不気味な音をたてて消えていく。何回もこの繰り返しでうんざりする。やがて岩壁にぶつかり、リッジどうしは無理なので、夏道を取る。いかにも雪崩そうな雪面である。新雪をのけその下にステップを切る。少し登ると下はクラストした雪ではなく岩になってきた。その岩のちょっとした足がかりにアイゼンを食い込ませてじりじりと登った。やっと最悪部を過ぎ、上のリッジにたどり着くと、さっきのパーティーと出会った。これからはトレースがある。有り難かった。

やっと14時半に奥穂高岳の頂上に着いた。6時間半という吊り尾根の長い長い奮闘であった。

西風を受ける奥穂高岳には風に洗われた古いアイゼンの後が無数にある。西穂高岳までの道にもアイゼンのあとがあったが、まだまだに西穂高岳は遠い。吊り尾根を我等3人の技術水準ギリギリで通り過ぎた後、さらに西穂高岳までの道は厳しすぎる。陰った日を受け、山はその威力をさらに増し、厳しい山肌を表し始めた。はるか白山の彼方に太陽を押し付けるような雲が高く現れて来ていた。3時の交信で、西穂高岳行きを断念し、白出のコルへ向かうことを告げた。

クラストしたコルへの稜線は、何と素晴らしいことか。いままでの憂鬱な気持を一気に吹き飛ばし、快調に下る。この余りの相違に我ながら驚いた。冬季穂高小屋は屋根の一部が出ているだけであった。入り口を掘り起こし小屋に入る。低気圧は意外に早く来ている。明日は天気が悪くなる。早めにザイテンを下らなければならない。今日の苦しい戦いを話し、思い浮かべながら眠りについた。

春山気象報告

西阪　孚、宇都宮昭義

1、18 日間の天気

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
6：00	◎	◎	○	❄	❄	○	○	❄	❄	❄	❄	❄	◎	❄	❄	○	❄	◐
9：00	❄	○	○	❄	❄	◐	○	❄	❄	❄	❄	❄	❄	◎	❄	○	◎	◐
12：00	◎	○	○	❄	❄	❄	○	❄	❄	❄	❄	❄	❄	❄	❄	○	❄	◐
15：00	◐	○	◐	❄	❄	◐	○	❄	❄	❄	❄	❄	❄	❄	❄	○	●	◐

2、毎日の気象解説

4 日　日本海に弱い低気圧があるため、不安定な天気であった。

5 日　華北の高気圧のため天気は良かったが、温度が高かったのと、日本海に低気圧があるという 2 条件が重なったためか、坂巻の入り口で土混じりの雪崩に会う。

6 日　低気圧が太平洋に去り、華北の高気圧の張り出しが強かったので快晴であった。台湾に低気圧が発生。明日の天気は難しい。

7 日　台湾の低気圧が 1002mb に発達。四国沖に来て、前線を作った。降雪。風は弱し。

8 日　本邦上に低気圧があり、前線が太平洋上にあるため、雪と風で沈殿となる。

9 日　オホーツク海と黄海の高気圧のため、晴れとなるが昼頃から雪が降ったり、薄日が差したりで、不安定な天気であった。

10 日　蒙古およびバイカル湖の 1036mb の高気圧の影響で終日快晴となる。

11 日　アムール川上流の 1027mb の低気圧が前線を引っ張り、また 1024mb の低気圧がその前線上にあったため、前日と打って変わって終日雪が降り、風が強かった。

12 日　昨日の前線の名残りで終日天気が悪く、又華北に続々と低気圧が発生したため、ここ 2・3 日は天気が悪い。

13 日　満州、日本海、本州、台湾に低気圧があり、これが前線で繋がり、一日中風強く降雪。天気図見通しは全くダメ。

14 日　低気圧は日本海と太平洋岸にあり、二つ玉低気圧の典型的な形をなし、ますます天気の見通しは悪い。

15 日　やはり二つ玉低気圧配置で、昨日よりひどい風雪である。時間を追うにつれ、大陸に続々と低気圧が発生し、また各々が発達して東進す。絶望的である。

16 日　大陸の低気圧群がひとつに纏まって、発達し本邦上にあるため、風も強く（20 ～ 30m もありそう）小石も吹き飛びそう。

17 日　大陸の高気圧が張り出して来たが、太平洋に去った低気圧も強く、まだその名残か天気は悪く風も強い。

18 日　5：30 の天気予報では、今日、明日は晴れるが時々雪とのこと。満州と黄海の高気圧によって、雪は小降りとなったが、風は相変わらず強い。雪はサラサラとして雪崩の危険性あり。第二テラスは雪壁となっている。BA 取り付きまでは、深いところで 2m はありそう。

19 日　日本海の高気圧 1028mb のため久方ぶりの天気になり、皆の顔も嬉しそう。しかし、大陸と台湾に 1006mb、1002mb の低気圧発生。明日の午前中まではもつか。吊り

尾根は腰までの雪がある。

20日　アムール川上流と本州上に低気圧があり、大陸の高気圧も伸び悩み風は強い。
予想より早い低気圧の発達である。午後から雪混じりの雨となる。

21日　昨日の低気圧は北海道に去り、大陸の高気圧が張り出してきたので天気は良くなってきた。

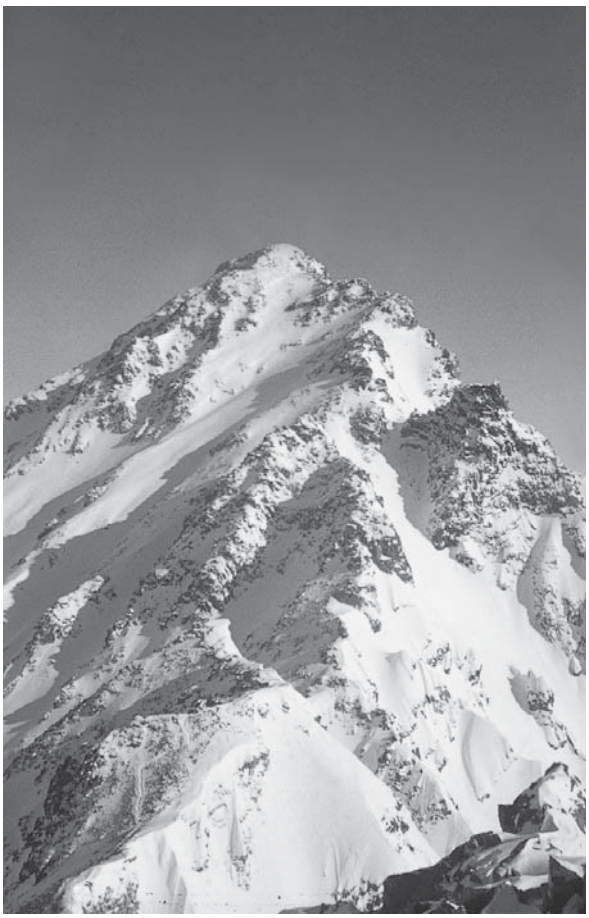
3、総　論

今回ほど天候に成否が左右される事実を知らされた合宿はなかった。1、2、から分かるように、12日頃から二つ玉低気圧が強い前線を伴った気圧配置となって、本邦付近に17日頃まで停滞したのは、春の気象の定説から見ると極めて希なことであった。このため風は強く雪はサラサラで、行動した日は「眼つぶし」の喰いっぱなしであった。

積雪は例年に比し多く、吊り尾根は腰までのラッセルがあったり、第二テラスは雪壁となったり、A沢付近は2mの積雪があった。さらさらの雪が風に飛ばされて、地形的に差が大きかったようである。

5日の坂巻と20日の釜トンの雪崩を天気図その他から見ると、温度は高く、何れも前日、前々日にサラサラの雪が降っており、天気図は日本海に発達した低気圧が前線を伴っている。即ち一歩客観的にみれば、底雪崩の可能性が十分であったので、20日の西尾根下山に、尾根筋を取ったのは賢明であったと思う。

今回のような気象は稀なことと思いますので、この報告が今後の参考になれば幸いです。



●明神岳からの前穂高岳頂上